

『原爆詩集』の文字表記

文学部文学科日本文学専攻

新田 大輝

序章 峠三吉『原爆詩集』について

原爆文学について論じるとき、事実と虚構というテーマを避けて通ることは難しい。生み出された原爆文学がどのような形態を取っているとしても、その根底には必ず「原子爆弾が落ちた」という日本に重大な変化をもたらす歴史的事実が存在するからである。松岡直美が大田洋子の『屍の街』¹について「大田が手記と呼ぶように被爆体験記録であり事実隣接する」²と指摘するように、原爆文学の持つ「記録／虚構、政治／文学」³の境界線は複雑かつ多層的に入り組んでおり、その境目は曖昧である。

本論文では、峠三吉の『原爆詩集』における事実と虚構を見極める際、峠が詩の中で繰り返し用いている「広島」「ひろしま」「ヒロシマ」という三つの表現の分析が効果的なのではないかという仮説のもと、考察を進めた。一九四九年の五月二十六日に執筆された、「巷にて」に続いて一九五一年四月までに書きあげた二十五編を収録した『原爆詩集』は、当初五〇〇部の自費出版本として、一九五一年八月六日の平和大会にささげられた。大きな反響を呼んだ一方で、「原爆の政治的性格が捉えられ現されてはいない」⁴等の、作品を単なる事実の記録に近いとする批評もあった。こうした批評に関連して、峠は選考に携わった『原子雲の下より』⁵に集められた老若男女の詩を選ぶにあたって、

詩の選考に当っては当然感動性と記録性が眼目となるが、そのために具体的であり、生活に密着したところであつたわれてい

るものということを考え、抽象的なもの、類型的なもの、主観的なものを排除し、現在の生活につながる原爆の悲惨さと、それと闘う姿が反映されるように努めた。⁶

と述べており、実際に客観的かつ具体的な事実を踏まえて書かれた作品を原爆文学として高く評価する傾向があったことが窺える。『原爆詩集』についてもその随所で記録的な手法が用いられており、例えば「倉庫の記録」は「その日」「二日め」「三日め」と日記のよな形で「八日め」までの八連からなっている詩である。内容についても、「二日め」の冒頭は「あさ、静かな、嘘のような静かな日。」「三日め」の冒頭は「K夫人の容態、呼吸三〇、脈搏一〇〇（省略）」と事実に非常に隣接した、記録的手法を用いていることがわかる。他にも「墓標」に繰り返し登場する「済美小学校戦災児童の霊」という文字列をはじめとした具体的な「原爆効果測定器」「広島平和都市建設会社」といった言葉は、やはり峠の原爆詩に対する「具体的であり、生活に密着した」⁷ものという考え方が色濃く反映されていると言えるだろう。

一方で、『原爆詩集』が文学として高く評価されていることも事実である。堀本嘉子は同詩集について「原爆投下という事実を伝えることのみ縛られず、同時代の問題を告発していく政治的役割も担おうとしていた」と述べており、⁸峠が原爆詩人として残したものが単なる記録ではなく、自らの意志を内包し、それを外部へと発信するものであるとしている。ここでの「政治的役割」について、壺井繁治の『詩と政治の対話』を引用したい。⁹

詩が政治的であるということは、その詩に安易に、いわゆる「政治的用語」を盛りこむということではなく、今日の事実を根本的に動かしているところの、政治機構が織りだす社会のさまざまな模様の裏に潜む本質的意味をさぐりあてること、今日の政治によって歪められた人間内部の暗黒的部分や、その無意識的な深層部に光りをあて、それを外部にとりだして、陽ぼしにかけることである。これが、最も政治的であることは同時に最も文学的であること、というほどの指摘実践過程における主題の意味である。

ここで重要なのは、政治的な詩が果たす「外部にとりだして、陽ぼしにかける」役割である。単なる原爆被害の羅列に終わらず、そこから湧き出た怒りや、こうしたことを二度と繰り返してはいけないという決意を詩という形式で外部へと発信することが、峠の作品を文学的たらしめる要素としている。また、『原爆詩集』内における具体的な文学表現についても、野坂昭雄が「死」について、「声にならぬ声」を拾いあげている姿勢を「倫理的な訴え以上に、詩の表現を追求しようとする峠の姿勢が窺える」¹⁰と指摘しているように、先行研究においても『原爆詩集』に対し、文学的評価をする書籍・論文が多数存在する。

こうした『原爆詩集』における「記録」と「文学」の境界を考える上で、峠が繰り返し用いる「広島」「ひろしま」「ヒロシマ」という三つの表現は大きな役割を果たす。「広島」とは実在する中国地方の一都市であり、実在する地名を登場させ、さらにその都市でしか成立しない作品をつくる点において、「広島」という言葉は作品

を大きく「事実」へと引っ張る力になる。そうした「事実」に近い表現が発音を変えぬまま「ひろしま」「ヒロシマ」と表記を変えることで、作品全体にどのような影響を与えるのだろうか。こうした分析にあたって、『原爆詩集』の文字表記に絞り先行研究を整理すると、ダックワース・ネイサンが峠の詩作において「都市を昔からの友達とみなす。」特徴を踏まえたうえで、¹¹

「夜」という詩で、峠が「ひろしまよ」を書く。疑いもなく、この行はなくなった親友への悲しい声である。そして、「死」という詩で、次の行が現れる。〈ヒロちゃん ヒロちゃん〉この名前が「広島」の読み方の最初の半分と同じであることは確かに偶然ではない。だから、〈ヒロちゃん〉は峠の好きな都市への呼びである。

と述べている。また、望月悠馬は「原爆詩における『表記』の問題」にて、『原爆詩集』に登場する「広島」「ひろしま」「ヒロシマ」の三表記を集計し、それぞれの表記数がほぼ同数であったことから「峠が表記を〈平等に使用しよう〉という創意があり、それによって詩集全体を設計しようとしている可能性を示唆している」¹²と指摘している。こうした先行研究を踏まえ、『原爆詩集』における峠の「広島」「ひろしま」「ヒロシマ」表記の使い分けを、他の原爆詩人の用いる表記も手掛かりに考察し、峠の世界を分析する。

第一章 原爆詩人の「広島」、「ひろしま」、「ヒロシマ」

第一節 栗原貞子『ヒロシマ・未来風景』

栗原貞子の初の詩歌集『黒い卵』が中国文化連盟叢書より刊行されたのは、広島へ原爆が投下された一年後、一九四六年の八月である。「黒い卵」「戦争に寄せる」など複数の詩は既に戦前より創作されており、第一詩集に原爆投下以前の世界を描いた作品が含まれていることが、峠との相違点である。一方で、詩集の題名に「ヒロシマ」という言葉を入れた当詩集は、栗原が六十一歳にあたる原爆投下の二十九年後、一九七四年に刊行されていることが特徴である。つまり、比較的原爆投下直後であり、朝鮮戦争へと進む世相を現在進行形で反映した『原爆詩集』に比べ、原爆投下から時間が経った広島の様子を描いていること、また終結に向かうベトナム戦争の最中であつたことに留意しながら、「ヒロシマ・未来風景」の中に現れる「ヒロシマ」表現について分析していきたい。

まず、「ヒロシマというとき」にでてくる「ヒロシマ」である。多くが〈ヒロシマ〉と人間が発する声として表現されているこの詩は、特に二連目が印象的である。¹³

〈ヒロシマ〉といえは

〈ああ ヒロシマ〉とやさしくは

返ってこない

アジアの国々の死者たちや無告の民が

一斉に犯されたものの怒りを

噴き出すのだ

〈ヒロシマ〉といえは

〈ああ ヒロシマ〉と

やさしくかえってくるためには

捨てた筈の武器を ほんとうに

捨てなければならぬ

栗原の書くアジアの人々の返答としての「ヒロシマ」は、実在する都市を指しているわけではない。同詩の一連目で〈ヒロシマ〉といえは」に続く語句が「パール・ハーバー」「南京虐殺」「女や子供を壕のなかにとじこめ／ガソリンをかけて焼いたマニラの火刑」であるように、ここでの「ヒロシマ」は太平洋戦争下で日本軍が能動的に起こした行為であり、栗原はそれに対する感情を「血と炎のこだま」、「一斉に犯されたものの怒り」と表現する。こうしたカタカナ化による感情の内包効果に加えて、「アジアの国々」の人々が主体になっていることも、カタカナを選択した一因であろう。日本国外で生活をする多くの人々にとって日本の地名を聞き、そこにあつる都市の風景や空気を詳細に想像することは難しいはずである。具体的都市の映像を脳内再生することが困難であるとき、その都市で起きた出来事が先に想起されるのは自然なことであろう。「アジアの国々」の人々が主体であること、その人々が対象に対して特別な感情を抱いていることよつて、「ヒロシマ」という四字のカタカナ表現が都市としての意味を越え、また「原爆」という意味も越えて、「悲劇」や「戦争」という出来事に対する「怒り」を示すことが出来ている一例だろう。こうした「感情の対象」としての

「ヒロシマ」を、栗原は同詩集「沖繩、ヒロシマから」で「焼土の上にヒロシマがたちあがったように」と表現する。このような原爆投下を経て広島が焼け、新たに「ヒロシマ」が生まれた、という書き方については、大田洋子「夕風の街と人と 一九五三年の実態」に似たような記述がある。¹⁴

「そういえば、この市街の全体が幻想的ですからね」

「そうなんです。実態とは思えない。どこを歩いてみてもね」

(……)

「ほんとに映画のセットのようなものなんですからね。表から見るともとの店になっても、裏へまわれればからっぽなんです。酒と料理がきていた。」

「誰かが云ったんだけど」

島崎が形を崩さない適度な硬さで、軽く笑い、

「この街では片カナでヒロシマと書く『ヒロシマ』が出来つつあるんで、復興ではない——」

「そう。私もそう思うんですよ。復興とは別のものです。ヒロシマという字はいやな字だわ」

栗原の用いる「ヒロシマ」との共通点は、「復興ではない」という点だ。「焼土の上に」という表現からも分かるように、以前の街に再び戻るのではなく、消えた以前の街の上に別の街が生まれている、という意味合いが「ヒロシマ」というカタカナに込められている。ここで注目したいのは、栗原の書く「ヒロシマ」が生み出された事について焦点を当てているのに対し、大田の書く「ヒロシマ」

が、失われたものについて焦点を当てている点である。栗原が書く「ヒロシマ」の主体である「アジアの国々」の人々は、戦前まで「広島」という都市の存在自体を知らなかったが、太平洋戦争、及び原爆投下を境に「ヒロシマ」という「怒り」を内包した概念としての存在を知ることになる。一方で大田の「この街」で暮らし続けてきた人々にとっては、今まで最もよく知っていた「広島」という都市が戦争、原爆によって消え、そして新たに出来つつある「ヒロシマ」は「からっぽ」であり、「市街全体が幻想的」に映るようになる。つまり、二者の主体、視点は違うものの、八月六日以前には一都市として存在していた「広島」が、その日を境に内部で生活していた人間にとってのものではなく、外部の人間のものへと移り変わった様子を示す文学表現として「ヒロシマ」が使用されていることがわかる。

使い分けについてはどうか。『ヒロシマ・未来風景』には、カタカナ表記の「ヒロシマ」のみが登場し、「広島」「ひろしま」は存在しない。「ニッポン・ヒロシマ」に出てくる「御存知、八月六日は／ヒロシマ二十万の市民が／熱線にあぶり殺された日」は、限りなく歴史的事実に近い記述であり、尚且つ外部からの視点でもないが、「ヒロシマ」表記が採用されている。一方で七年前に刊行された詩集『私は広島を証言する』¹⁵では「広島に原爆が落ちたとき」¹⁶のような、似たような文脈で漢字を選択している場面や、「わたしたちのヒロシマは」¹⁷、と主体が「わたしたち」という内部の人間であるにもかかわらずカタカナを用いている場面もあり、詩作全体を見渡せば複数の表記は登場するものの、ひとつの詩集内で表記を分散させる意識はさほどなかったと思える。

第二節 原民喜『原爆小景』

一九五〇年に近代文学八月号より掲載された『原爆小景』は、朝鮮戦争勃発と同年、そして原民喜が自殺する一年前に書かれた詩群である。Urszula STYCZEKによると、八月六日から書き続けた「原爆被災時のノート」のメモを詩に膨らませており、ノートのメモとほとんど同じ箇所があることから「メモに描かれた現実にもっとも近く」、「原は記録者としてこの詩を書いた」と言える。¹⁸ 全九編からなるこの作品群は、「永遠のみどり」を除く八編の詩が漢字とカタカナで書かれており、小海永二は「理念的な意味でも、記述の方法に関しても、完全なりアリズムの詩」であり、「漢字およびカタカナの硬質な漢字が内容としての事実記録の直接的な迫真性を支え」¹⁹ ていると評する。ここでは広島をカタカナの「ヒロシマ」と表記することで作品の虚構性、文学性を高めた栗原、大田の表現方法とは対比的に、カタカナで表現するということがより記録性を高めるために使われている。この八編の中に「ヒロシマ」という記述があったとしても、必然的にそれは「記録」の一部として読まれることになる。その点、唯一「ヒロシマ」というカタカナ表記が存在する最後の詩「永遠のみどり」が、「ヒロシマ」「デルタ」をのぞけばひらがなと漢字でつくられていることは「ヒロシマ」の異質さを強調している。「ヒロシマ」を使用したくてこの詩にひらがなを用いたのか、それともひらがなを用いる中で「ヒロシマ」という表記を出したのかは定かではないが、カタカナと漢字で構成されたノートとは異なり、ひらがなを用いている時点で、「永遠のみどり」は他八編より「事実記録の直接的な迫真性」が薄いと言えるだ

ろう。ここでの「ヒロシマ」はその他の表現が硬質で、リアリズム溢れる文体でないからこそ、その硬質さが浮き彫りになり効果を發揮しているのだ。「ヒロシマのデルタに」に続く語句が「若葉うづまけ」「青葉したたれ」と抒情的であるゆえ、「ヒロシマ」が記録ではなく、意志や史実を内包する言葉になりうるのである。

第三節 四國五郎『戦争詩』

四國五郎は、峠を中心とする「われらの詩」に参加し、表紙を担当する他、詩も多数発表し、詩と絵による反戦平和運動を推進した詩人である。一九五一年に峠が『原爆詩集』を出版した際には表紙と見返し絵を描くなど、峠と深い関わりがあった人物だ。自身的一年間にわたる戦争体験をドキュメンタリーのようにまとめた『戦争詩』は、一九六六年に執筆されたものの生前に出版されることはなく、後に藤原書店より生誕百年を記念し未公刊詩集として発売されている。²⁰ その中から、「わかれ」の第一連を引用する。

ここはひろしまの街か

蜻蛉をとり

河で泳ぎ

露地 露地を走りまわった ひろしまの街か

広島を離れ、隠密に旅発つ出発の瞬間を描いたこの詩は、第二連「比治山のうえで」と続いていく。長男・四國光の注釈によると、「比治山」とは「四國の家の近くにあり子供のころの遊び場であった」²¹ という。読み進めるにつれ、出発前、駅で汽笛を聞きながら

子供の頃に遊びまわった広島を思い起こしている場面が思い起こされる。

引用箇所その他、「わかれ」にてひらがなの「ひろしま」表記が用いられている箇所は、第五連の「これが ひろしまの駅か」、「ひろしまの街が横すべってゆく」、第六連の「ひろしまよ 恋しい人たちよ」である。共通しているのは、ここで四國が見ているのは、視界に広がっている広島ではなく、「サイレント映画がパンして駅となる」と詩中にあるように、自身の記憶の中にある、過去の広島である点だ。それは幼い頃に蜻蛉をとり、河で泳ぎ、露地を走りまわった回想の街であり、恋しい人たちのいる自身を中心として広がっている広島である。栗原の「ヒロシマ・未来風景」同様に創作時期にはベトナム空爆が激化していたが、そこにアジアの視点はなく、あるいは大田の「夕風と街と人」のように原爆後の空っぽの街の象徴として書かれているわけでもなく、あくまでも自身が主体の「サイレント映画」として、確かに存在していた思い出を内包した街並みとして「ひろしま」を用いている。

こうした個人的な記憶を呼び起こす効果がひらがなにあるのだとするならば、井上ひさしが『少年口伝隊一九四五』にて「広島がヒロシマになった日」²² という表現をしているように、八月六日を境に漢字の「広島」がカタカナの「ヒロシマ」へと変容したこと、ひらがなの「ひろしま」が用いられていることは別問題として考えるべきであろう。つまり原爆が落ちる前、「わかれ」内にて回想した心の中の「ひろしま」は、例え「広島」が「ヒロシマ」へと生まれ変わっても、心の中でずっと「ひろしま」であり続けるのである。それは四國が一九八〇年に発表した朗読詩「ひろしまの子」²³

の中に繰り返し登場する「ひろしまの子」が、「ひろしま」を故郷に持ち、原爆を経て今も「あなたの横」を並んで歩いているように、原爆を境に変わった街も、原爆以前の街も人は地続きで個人の記憶を持っており、その存在が読者の個人的記憶に重なることで激しく心を揺さぶる効果を持つのだ。なお、四國は詩中で「ひろしま」というひらがな表記を多く用いているが、表現の使い分けをしていなかった、また関心がなかったというわけではない。『ひろしまのスケッチ』では、

私の好みからいえば、日本語をカタカナで表すのは好きではない。しかし『ヒロシマ』の場合は違う。

『広島』は、行政上の一定の区画内を総称する地名に過ぎないが、『ヒロシマ』は、核戦争を防止し、核を廃絶し、この地球上で平和に生きてゆかねばならぬという人類の良心を凝縮した世界共通語なのである。また、そうでなければならぬ。²⁴

と明確に述べている。こうした「ヒロシマ」＝「世界共通語」という認識を抱きながら「ひろしま」というひらがな表記を多用する背景には、やはりそこに含まれる個人的な記憶、その人にしか分からない景色の存在を描き出そうというねらいが伝わってくる。

第二章 『原爆詩集』における「広島」「ひろしま」「ヒロシマ」

第一節 『原爆詩集』と「広島」

ここまで広島で生まれ、原爆を経験した詩人たちの「広島」「ひろしま」「ヒロシマ」について触れてきたが、峠三吉『原爆詩集』が他の原爆文学作品に比べ大きく異なっている点が二つある。ひとつは、表現の多様性と平等性である。望月悠馬の集計結果によると、『原爆詩集』に登場する各表記の回数は「広島」が十二回、「ヒロシマ」が十回、「ひろしま」が十四回と三つの表現が近い回数登場していることがわかる。²⁵ また、中でも「影」、「墓標」では二つの表現が、「炎の季節」ではひとつの詩に三つの表現全てが含まれており、これはひとつの詩の内部に存在する表記を「ひろしま」で統一していた四國五郎「わかれ」、同じく「ヒロシマ」で統一していた栗原貞子「ヒロシマというとき」と比較しても異質であり、峠の明確な表現の区別意識が強調されていると考えることができる。

もうひとつは、その修正回数である。三人社より出版されている自筆原稿ではその痕跡を見ることができ、²⁶ 膨大な修正履歴の中でひととき修正数が多い箇所が、「広島」「ひろしま」「ヒロシマ」の三単語をめぐる表記の修正であり、中には「夜」のように修正箇所が三単語をめぐる表記のみの詩も存在する。ここから推測されるのは、峠が何らかの判断基準によって「広島」「ひろしま」「ヒロシマ」表記の使い分けに悩んでいた、また考えを変えた瞬間があったこと、そしてその境目が曖昧で、近い部分にあるということである。

る。このことを踏まえて、峠が『原爆詩集』にて表記を使い分けた狙いを考察していく。

はじめに、「広島」が使われた部分を整理する。『原爆詩集』で「広島」が用いられているのは十二カ所であり、実際に調べると、²⁷

- ① 涯しない瓦礫と燃えさしの堆積であった広島（八月六日）
- ② 急に立ち上った焦茶の山脈の／すり鉢の底に／つぶれた広島から（炎の季節）
- ③ 広島平和都市建設株式会社（墓標）
- ④ 朝鮮のお友だちは／炎天の広島駅で（墓標）
- ⑤ 今日を迎えた広島の／街の真中 八丁堀交差点（一九五〇年の八月六日）
- ⑥ 一九五〇年八月六日の広島のを（一九五〇年の八月六日）
- ⑦ 広島を中心、ここ紙屋町広場の一隅に（その日はいつか）
- ⑧ 船倉に積みこまれ死にいった広島港町（その日はいつか）
- ⑨ まい晩日本のまぢまちが藁束のように焼き払われるそのなかで／なぜか広島だけ焼かれぬ／不安と噂の日々の生活（その日はいつか）
- ⑩ あの前晩 五日の深夜、広島を焼き払うと（その日はいつか）
- ⑪ 日本列島の上、広島、長崎を選んで投下され（その日はいつか）
- ⑫ 此のなつかしい広島、広場につづく道がやがてひろげられ（その日はいつか）

となっている。続いて、各箇所について自筆稿本を参考に表記修正の変遷である。

- ①「ヒロシマ」↓「広島」
- ②「ヒロシマ」↓「ひろしま」↓「広島」
- ③変化なし

④「広島」↓「ヒロシマ」、作品集の最終的な表記は「広島」

⑤「ヒロシマ」↓「ひろしま」↓「広島」

⑥「ヒロシマ」↓「ひろしま」、作品集の最終的な表記は「広島」

※⑦～⑫「その日はいつか」は一九五二年六月の青木文庫版『原爆詩集』出版にあたって追加で書かれたものであるため、自筆稿本への記載なし。

まず、修正過程を考慮せずに最終的な表記だけについて考える。印象的なのは「一九五〇年八月六日」「その日はいつか」の二詩にみられる「広島」である。「その日はいつか」は原爆が落ちる前の日々から落ちる瞬間、直後を「君」というひとり人間の焦点に絞って描いている。この詩は「2」で「君」が暮らしていた原爆が投下される前の街の回想へ移る。ここでの⑧、⑨、⑩にある「広島」は原爆が落ちる数年前～前日の街並みの様子であり、原爆投下前である。こうした原爆投下前の街が「広島」と漢字表記されることは自然であるといえる。しかし、「一九五〇年の八月六日」の中で峠は、⑥「一九五〇年八月六日の広島」と表記している。この一カ所に限らず、⑤においても「今日」を指す名詞として「一九五〇年八月六日」と四行前に明確な記載がある。つまり、峠にとつての「広島」は原爆投下の前後にわたって跨がるものであり、第一章で述べた他の詩人らの「広島」、「ヒロシマ」観とは異なっていると

える。少なくとも一九四五年八月六日を境に「広島」が「ヒロシマ」へと変容した、つまり八月六日以前が「広島」で、八月六日以降は「ヒロシマ」と表記する、という単純な区別ではないことがわかる。

ここで、⑤と⑥の修正過程に注目すると、どちらも「ヒロシマ」という表記で書かれており、それが「ひろしま」、「広島」へと修正されていることがわかる。つまり、峠は「一九五〇年八月六日」の街をはじめは栗原貞子や大田洋子、原民喜と同じように「ヒロシマ」と表現し、しかし推敲を重ねるごとに「ひろしま」、「広島」へと変えていったということだ。ここから推測できるのは、「ひろしま」という表記が峠の持つ「ヒロシマ」の定義と「広島」の定義の中間あたりに存在する可能性が高いこと、そして最後に書かれた「その日はいつか」に出てくる「広島」の回数が一番多いことも合わせて、峠に「ヒロシマ」を「広島」にしていく、という修正の大きな共通方針があったということである。四國五郎が「ヒロシマ」を「世界共通語」というように、カタカナ表記は「戦争を防止し、核を廃絶」という意味を内包する。つまり峠は修正過程で、言葉の持つ意味を閉じていく作業をしたことになる。であれば、やはり「政治的性格が捉えられ現されていない」という『原爆詩集』への批判に疑問を感じざるを得ない。むしろ、「政治的性格」を捉えたうえで、その性格を薄めていく作業を行う過程に意味があったと考えるべきであろう。序章で紹介したように、この詩は五百部の自費出版本として一九五一年の平和大会に捧げられている。「広島」という原爆が投下された街の大会に捧げるにあたって「一九五〇年八月六日」という当時一年前にあたる街を「ヒロシマ」

と表現することが、実際にその街に住んでいる被爆者の目にどう映るか、という思考過程が峠にあったのであろうか。栗原や大田の用いる「ヒロシマ」から見てとれる、内部で生活していた人間にとつてのものではなく、外部の人間のものへと移り変わったあとの様子、という要素がカタカナの使用によつて含まれることを避けたかったことが私には伝わってくる。こうした言葉が届ける意味の範囲に関して、平和大会へこの詩が捧げられる一年前、昭和二十五年五月に『われらの詩』へ寄せた「象徴的手法について」にて峠は、

われわれの感覚は思想から切り離され生活から抽象されては存在しないし、詩語にしても生活感覚によつて選択されるほかはない。だから、たとえば疲れて帰って熱い「豆腐汁を食う」場合、その感動を「白痴した脳髓が生きた坑道を降る」のでは困るのであつてどこまでも「熱い豆腐汁を食う」のでなければならぬし、それであつてはじめて社会的自我からの生活を背負つた象徴となるし、人間的な美の再生産のための感覚として生きうるのである。²⁸

と述べている。修正過程で「ヒロシマ」を「広島」としていく目的は、言葉の持つ本来の意味を失つた抽象的な表現からの脱却であつたのだろう。たとえば「広島」が「つぶれた」とき、それが「ヒロシマ」であつては困り、あくまでも峠の背負ってきたこれまでの生活から生まれる言葉が「広島」であるように、峠の生活感覚の範囲内である言葉をなるべく使用することで、『原爆詩集』における詩的表現を研ぎ澄ませていった姿勢が窺える。

第二節 『原爆詩集』と「ひろしま」

次に、『原爆詩集』内で「ひろしま」が使われた部分を整理する。「ひろしま」が用いられているのは十四カ所であり、同様に調べると、

- ① この一夜／ひろしまの火光は／人類の寢床に映り（炎）
- ② 仆れた群に／寂寞とひろしまは燃え／燃えくずれ／はやくれ方のみち汐（盲目）
- ③ あの照りつけるまいにちを杖ついたあなたの手をひき／さがし歩いた影のないひろしま（としとつた母さん）
- ④ ひろしまは／もう見えない（炎の季節）
- ⑤ 狂い死なせたあの戦争が／どのようにして／海を焼き鳥を焼き／ひろしまの町を焼き（ちいさい子）
- ⑥ ぼくたちはひろしまの／ひろしまの子だ と（墓標）
- ⑦ ゆきあつても判らぬからだとなつた／ひろしまの人ならば（影）
- ⑧ ひろしまの伝説がやさしい唇にかたられるのをゆめみる（朝）
- ⑨ 栗粒するひろしまの灯（夜）
- ⑩ ひろしまよ／原爆が不毛の隆起を遺すおまえの夜（夜）
- ⑪ ひろしまの中の煌めく租借地（夜）
- ⑫ 何処ともなくいざり寄るひろしまの灯（夜）
- ⑬ 歴史の闇に／しずかに低く／ひろしまの灯は溢れ（夜）
- ⑭ ひろしまの体臭をあなたがもつなら（呼びかけ）

となつている。続いて、各箇所について自筆稿本を参考に表記修正

の変遷である。

- ① 「ヒロシマ」→「ひろしま」
- ② 変化なし
- ③ 変化なし
- ④ 「ヒロシマ」→「ひろしま」
- ⑤ 「ヒロシマ」、作品集の最終的な表記は「ひろしま」
- ⑥ 「ヒロシマ」、「ヒロシマ」→「ひろしま」、「ひろしま」
- ⑦ 「ヒロシマ」→「広島」、作品集の最終的な表記は「ひろしま」
- ⑧ 「ヒロシマ」→「ひろしま」
- ⑨ 「ヒロシマ」→「ひろしま」
- ⑩ 「ヒロシマ」→「ひろしま」
- ⑪ 「ヒロシマ」→「ひろしま」
- ⑫ 「ヒロシマ」→「ひろしま」
- ⑬ 「ヒロシマ」→「ひろしま」
- ⑭ 変化なし

表記修正について区分すると、「ヒロシマ」表記であったものを過程の差異を含め最終的に「ひろしま」にしたものと、当初から変化なしのものである。ただ、⑭「呼びかけ」が一九五〇年五月に発行された『反戦詩歌集』第一集に掲載と『原爆詩集』内の詩では最初に発表されていることから、「ヒロシマ」表記を「ひろしま」に直していくうちに、はじめから「ひろしま」で書くようになったという訳ではなく、明確にひらがな表記を選択し、「ひろしま」表記を用いていたということに注意しなくてはならない。

続く言葉にも注目したい。「広島」については、「駅」「街」「空」「紙屋町広場」「港町」「広場につづく道」と、実際の「広島」に存在する事実の描写が続いていた。一方で、「ひろしま」に続く言葉をまとめると、「火光」「もう見えない」「子」「人」「伝説」「灯」「体臭」と、抽象的な言葉や比喩的表現が目立つ。直前についても「影のないひろしま」のように、目の前の光景に対する説明的な表現ではない。この二つの表現について、両者ともにはほぼ全てが「ヒロシマ」表記であった地点から校正を重ねて「広島」「ひろしま」へと分岐していることから、制作過程において、峠が詩の記録的説明やリアリズムが求められている場面、文学的なアプローチが必要な場面に応じてそれぞれ表記を変えていったことが推測される。

ところで、⑤「ちいさい子」内に出てくる「ひろしま」へと続く言葉は「の町を焼き」である。「戦争が」、「ひろしまの町を焼き」という文脈において登場する「ひろしま」は、前段の分類に沿って考えると「広島」表記が適切なのではないかと思われる。実際に第一章で扱った⑤の「一九五〇年の八月六日」では「広島／街の真中」と「街」に連結する漢字表記が登場している。これについては別に扱わねばならぬ問題である。詩「ちいさい子」は作者が「ちいさい子」に「おまえはいったどこにいるのか」と繰り返し語りかける形式で書かれており、漢字が意図的にひらがなへと開かれた部分が多い。ただ、「ちいさい子」にわかるように、あるいは「ちいさい子」の書ける範囲に合わせて難しい漢字をひらがなへ開いているというわけではない。「躓いた」「蛆」「うち殺し」のように、体言、用言の区別なく漢字で書かれるところは漢字で書かれている。そこでこの詩において推測できるのは、「ちいさい子」にとって馴

染みのない言葉が漢字で書かれているということである。「おまえだけにつたえたかった」「おまえをひとりにさせてゆく切なさを」「いってやるぞ」「追われ走るおまいのなかで」等の表現を見てみると、「つたえる」「ひとり」「いう」「おmoi」など「ちいさい子」が日常的に耳にしていたり、発しているもおかしくない言葉がひらがなで書かれていることがわかる。「ちいさい子」にとって親近感のある言葉ほどひらがなで、親近感のない言葉ほど漢字で書かれているのであれば、たとえ「町」を修飾していたとしても、「ちいさい子」にとって親近感のある言葉として、峠が「広島」ではなく「ひろしま」というひらがな表記を選択した可能性がある。こうした表記選択については、第一章で述べた四國五郎の、自身が主体の「サイレント映画」として、確かに存在していた思い出を内包した街並みとしての「ひろしま」表記に類似するものがある。「ちいさい子」の持つ普段使用する言葉としての「ひろしま」は、「ちいさい子」の生活圏内の言葉であり、それは「わかれ」のように「ちいさい子」から見えている個人的な記憶としての広島なのである。こうした個人のものとしてのひらがなの使用意図は「としとつた母さん」にもみられる。同詩の第四連を引用すると、

この冬近いあかるみのなか

あなたはまた

かわいい息子と嫁と

孫との乾いた面輪をこちらに向かせ

話しつづけているのではないだろうか

仏壇のいろあせた写真が

かすかにひわつて
ほほえんで

この詩の中で登場する「としとつた母さん」である「あなた」が、乾いた写真の顔に向かって話し続けている場面が登場する。ここでの「としとつた母さん」は過去を回想したり懐かしんでいる訳ではない、自らの記憶の中に閉じこめられているのである。「終始なか／咳いているお母さん」と第二連で、「いまはじぶんの咳くことばも／はつきり分からぬお母さん」と第八連で描写されるように、息子とその嫁、孫を亡くし、目の前の現実を直視できない人物が写真との対話に閉じこもっているとき、そこに見えているのは目の前の「広島」ではなく、「お母さん」の記憶としての「ひろしま」である。ここで使用されている「ひろしま」というひらがなは、「ちいさい子」では生活圏内の言葉としての「ひろしま」であるならば、「としとつた母さん」では「じぶんの咳くことば」も、はつきりとわからなくなってしまう結果としての、表音文字としての「ひろしま」であろう。同じ個人的記憶という出口でも、その過程にあるひらがな選択の理由は異なっていると考えられる。表意文字である漢字に比べ、表音文字であるひらがなとカタカナを選択するとき、原爆文学というカタカナ表記が特定の意味を持つ特殊な場合において、ひらがな表記が最もその音の持つ意味から離れているという特徴が、こうした部分に活かされている。

次に、「広島」の後にはみられなかった、「ひろしま」に続く人間について考えたい。墓標にみられる⑥「ぼくたちはひろしまの／ひろしまの子だ」、「影」にみられる「ひろしまの人ならば」、また直

接的ではないが、⑭の「呼びかけ」にある「ひろしまの体臭」も、「ひろしまの人間が持つ体臭」と言い換えることができよう。では人間を修飾する「ひろしま」とは果たして共通の概念なのであろうか。こうした疑問に関連して、野坂昭雄は『原爆詩集』内で唯一全てがひらがなで書かれた「序」について、

この序詩は、もともと「生」という詩として書かれ、推敲の結果現在の形になったことが知られている。具体的な表現が完結なものとなり、全てが平仮名化されたことで、この詩は現在のように広く知られ、またしばしば朗読されるものとなった。

(中略)

全体が平仮名で書かれている点は、子供らしい純粹な訴えであるように感じさせる一方で、ほとんど主体および対象が著しく抽象化されていることも示しているように。いずれにせよ、改稿の過程で生じた変化は、固有の表現の追求と、共有可能な「詩」への志向とが交錯している時の状況を伝えている。²⁹

と述べている。ここで指摘されている、ひらがな化によって生まれる効果は二つに分けられる。ひとつは「詩としての共有力の向上」、もうひとつは、「主体および対象の抽象化」である。実際に「序」では「ちちをかえせ」と「こどもをかえせ」、そして「へいわをかえせ」という複数の主体からなる叫びが、ひらがな表記によって、ひとつの訴求力ある叫びとして抽象化されている。では、実際に「ひろしま」が指すものについて分析していく。

まず、「墓標」についてである。原爆により亡くなった小学生の

墓標に「君たち」と語りかける形式で書かれているこの詩は、死ぬ前に子共たちが見たであろう複数の光景や境遇を時が詳細に想像しており、終盤にかけて時の反戦意志へと変わっていく。⑥「ぼくたちはひろしまの／ひろしまの子だ」とは最終連に登場し、墓標の子どものたちの生前の記憶としての「ひろしま」ではなく、時の反戦意志としての表現であることが特徴である。ここでの文脈での使用意図は、むしろ第一章で引用した四國五郎の「この地球で平和に生きてゆかねばならぬという人類の良心」としての「ヒロシマ」定義に近い。

君たちよ

もういい だまっているのはいい

戦争をおこそうとするおとなたちと

世界中でたたかうために

そのつぶらな瞳を輝かせ

その澄みとおる声で

ワッ! と叫んでとび出してこい

最終連の一行目から、⑥の四行前までである。「叫んでとび出して」、「ひろしまの子」だと「みんなのからだ」へ飛びつくという一連の流れが、非常に能動的であることにも着目したい。自ら「世界」へと飛び出す行為は外部に対する働きかけであり、記録的事実からも逸脱していることから、ここでは明確な反戦意志を内包する「世界共通語」としてのカタカナ表記の「ヒロシマ」が適用されても不思議ではない場面である。では、なぜ「ヒロシマ」表記が「ひ

ろしま」へと校正されたのかを考察するにあたって、一連前の第十六連にある、「ほんとうのことを書いた新聞を売る」という表現が興味深い。ここでの「ほんとう」がひらがなへと開かれるにあたって、少なからず皮肉の要素がこめられていると考えてよい。「本当のことを書いた新聞を売る」が「本当」である場合、それを「ほんとう」という表現に変えることで「ほんとう」≡「本当ではない」ことを読者に提示している場面である。この過程についてさらに細かく考えると、「ほんとうのこと」という言葉は、書かれた言葉ではなく聞かされた言葉として表現されている。つまり「日本の子供たち」は、その新聞の内容が本当か否かは分からないが、おとなたちに「ほんとう」であると聞かされ、「ほんとうのことを書いた新聞」だと思っただけで売っているのだ。ここでの聞かされた言葉としてのひらがな表記は、野坂昭雄の「朗読」としての効果に近いものがあるだろう。こうした手法が同様に墓標での「ひろしま」に使用されていると考えることができる。「つぶらな瞳」、「澄みとおる声」などの表現で、飛びつく主体である子どもたちの純粋さ、無知さを強調し、そうした子どもたちが発声する、聞かされた言葉としての「ひろしま」は、子どもたちがその言葉を発声した時点では「ひろしま」という音でしかない。しかし受け手がその言葉を聞いたとき、それは「広島」や「ヒロシマ」という意味を内包した言葉へと変容する。そして、「ほんとうのこと」同様に、ここで無垢な子どもたちが、その言葉の意味の持つ強さに無自覚であればあるほど、おとなたちに対する鋭い問いかけになるのである。そのためにもここでの表現が「ヒロシマ」であってはならず、「ひろしま」という子どもたちから発せられたそのままの音をそのまま詩に

表現することで、読者が自らそのひらがなをカタカナへと変換する行為に意味を見いだし、峠はひらがなを選択したのではなからうか。墓標では「ひろしまの子」に接続する「ひろしま」が意味を内包した言葉に変換される前の「ひろしま」であったのに対し、「影」の「ひろしまの人ならば」では、対象の抽象化による共有効果がみられる。「影」の「ひろしま」は第四連で登場する。

ああ、あの朝

えたいの知れぬ閃光と高熱と爆煙の中で

焰の光と雲のかげの渦に揉まれ

剥げた皮膚を曳きずって這い廻り

妻でさえ子でさえ

ゆきあっても判らぬからだとなった

ひろしまの人ならば

此の影も

記憶の傷に這いずって

消えぬものであろうに

この詩は原爆被害の痕跡を示す具体例の羅列が目立つ。「あかぐろい石の肌理にしみついた／ひそやかな紋様」「みかげ石の厚板にサツと焼き付けられた／誰かの腰」や、「どろどろと臓腑ごと溶けて流れた血の痕の／焦げついた影」、そして第四連へと続いていく。こうした具体的な光景に関して、平和大会で想定される原爆を経験した広島読者の中には、そのうちの一つの光景を実際に見たことがある人もいれば、全てに心あたりがある人、あるいはそのどれも

が想像は出来るが実際に見たことはない人もいるであろう。第四連に關しても同様に、「妻でさえ子でさえ／ゆきあつても判らぬからだとなった」人も当然いれば、そうではない人も当然、この詩を読むはずなのである。そうしたときに後者の人が感じる、この詩は自分以外の誰かのために書かれた詩である、という疎外感を「ひろしまの人ならば」という急速な抽象化が払拭している。第一章で四國五郎「わかれ」における「ひろしま」について、自身を主体とした個人的な記憶であると分析したが、ここで同様の効果をもつ「ひろしま」というひらがなを用いることで、具体的描写で取りこぼした全ての広島読者を「自分ごと」に引きずりこむのである。ここでの「抽象化」と「個人的な記憶」は一見矛盾しているように思えるが、対象を抽象化することにより、読者全員にとって主体的な記憶を呼び起こし、巻き込むという意味では両立しようと考えている。

第三節 『原爆詩集』と「ヒロシマ」

最後に、『原爆詩集』内で「ヒロシマ」が用いられた箇所を分析する。「ヒロシマ」の登場回数は十回であり、同様に整理すると、

- ① 焼け爛れたヒロシマの／うす暗くゆらめく焰のなかから（仮綴帯所にて）
- ② ウラニュームU二三五号は／予定されたヒロシマの／上空五〇〇米に（炎の季節）
- ③ たしかに／三尺ばかり／高くなったヒロシマ（炎の季節）
- ④ おれたち／ヒロシマ族の網膜から（炎の季節）
- ⑤ あんちゃんのヒロシマの／てらてら頭に油が溶ける（影）

⑥ 八月六日を命日にもつ全ヒロシマの／市民群衆そして景観、（一九五〇年の八月六日）

⑦ すべての集りが禁止され／武装と私服の警官に占領されたヒロシマ、（一九五〇年の八月六日）

⑧ ロンドンの中に燃えさかるヒロシマ（景観）

⑨ ニューヨークの中に爆発するヒロシマ（景観）

⑩ モスクワの中に透きとおって灼熱するヒロシマ（景観）

となつている。続いて、各箇所について自筆稿本を参考に表記修正の変遷である。

①～③ 変化なし

④ 「ヒロシマ」↓「ひろしま」↓「広島」↓「ひろしま」最終的な表記は「ヒロシマ」

⑤～⑩ 変化なし

そのほとんどが「変化なし」であることから、そしてこれまで見てきた「広島」「ひろしま」の多くが元は「ヒロシマ」であったことから、この十カ所の表現は当初のカタカナ表現のまま生き残ったものであり、峠が原爆詩集を書きあげた瞬間の感情を最もそのまま内包していると考えてよいだろう。まずはじめに注目すべきは、十カ所のうち唯一修正の跡がみられる④の「ヒロシマ」（炎の季節）である。二度の「ひろしま」、一度の「広島」を経た上で当初のカタカナへと戻っているのが興味深い。前後の語句を見ると、「おれたち」という人間の複数形と、「族」というその複数をまとめる言

葉が「ヒロシマ」を挟んでおり、こうした特徴は、後ろに人間が続くひらがな表記の「ひろしま」の特徴と一致している。ここから推測できるのは「影」でみられた「ひろしまの人ならば」のような、抽象化・共有化としてのひらがな表記として、ひらがなを二度選択した可能性である。また、両者がどちらも一度「広島」を経由している点も興味深い。互いに「広島族」、「広島の人」を経由し、前者はカタカナ表記へ、後者はひらがな表記へと落ち着いている。ここで注目したいのは、接続する「人」が個人を指すのに対し、「族」が明確にまとまりを指している点である。「ひろしまの人ならば」について、前章では読者全員にとつての主體的な記憶を呼び起こし、巻きこむ効果があると考察した。そして、それは「人」という個人に訴えかけているからこそ成り立つものであった。一方で「族」という言葉は「種類を同じくするものの集まり」を指している。つまり、外部の視点から「広島」を「民族の一種類」としてまとめた言葉なのである。「ひろしまの人ならば」というとき、それは話者を含めた同族に向けて発した言葉である。しかし「おれたちヒロシマ族の」というとき、そこには「ヒロシマ」を「族」としてまとめた外部の存在があり、その言葉を「おれたち」が客観的に使用しているという構図がある。こうした差異から、それぞれ漢字、ひらがな、カタカナを経た二つの表現が、最終的にひらがなとカタカナに落ち着いたと考えることができる。また、前章で述べた「墓標」における「ひろしま」が聞かされた言葉であったことから、「ぼくたち」という意志のない「墓標」での主体と対比させ、「炎の季節」での「おれたち」が発する意志をもった言葉の象徴として「ヒロシマ」というカタカナが選択された可能性も大いにあるだ

ろう。

続いて、修正されなかった他の九表現を整理する。例えば②、⑧、⑨、⑩は栗原貞子の「ヒロシマというとき」で用いられている「ヒロシマ」の定義に非常に近い。栗原が「ああ ヒロシマ」とアジアの国々の死者たちや無告の民の返答を表現したように、ここでカタカナ表記は原爆投下によって初めて「広島」という都市の存在を知った人々の発する外来語としての言葉を示している。②「予定されたヒロシマの」については、そこに原爆が落ちることを日本人が知っているはずもないため、主体はアメリカであり、原爆が落ちる場所を選ばなければ知ることもない標的地としての「ヒロシマ」である。ただ、この時点ではそこに怒りのような感情は含まれない。⑧、⑨、⑩においても同様に原爆以後に認知された言葉であり、ロンドンや、ニューヨーク、モスクワで発せられる「ヒロシマ」という言葉には、原爆投下前の歴史や記憶は含まれていない。こちらは原爆を経た、感情の対象としての「ヒロシマ」である。

一方で、その他(②、⑧、⑨、⑩以外)を見ると、大田洋子の用いる「ヒロシマ」のような内部の人間からみた空虚な存在としての「ヒロシマ」がある。①では、「あなたでなくなったあなたたち」のいる空間として「焼け爛れたヒロシマ」があり、③では「白骨と煉瓦層」で覆われた永遠に瓦礫が続く空間として「ヒロシマ」がある。ここではただ更地になり、原爆が落ちたことで以前と全く違う光景になった、という意味でカタカナの「ヒロシマ」が用いられている。やがて、⑤、⑥と復興が進み、しかしそこに再び立ちあがった街は以前の「広島」とは違うという意味で、「ヒロシマ」が用いられていく。⑤では、「映画館、待合、青空市場」など、街の復興

が進む中で、原爆が落ちたという隠しきれない証拠として残る「あんちゃん」の皮膚病を「ヒロシマ」と比喩し、⑥では「八月六日を命日にもつ」と、その日を境に何かが消え、今別のものが生まれているという文脈で「ヒロシマ」を用いている。そして新たに生まれた「ヒロシマ」では、「すべての集りが禁止され／武装と私服の警官に占領され」ている中で、「平和ビラ」や「反戦ビラ」をとろうとする「市民」と、それを阻止する「警官」の衝突が描かれる。ここで新たに生まれる疑問がある。②、⑧、⑨、⑩のような明らかに海外で発声されている表現がカタカナ表記であることは、日本で英語由来の言葉がカタカナで表記されるように、海外で外来語として扱われている日本の地名がカタカナで表記されることに不思議はない。また、⑤、⑥のような「別の街」の表象としてのカタカナ表現、その街で起こる反戦・平和への主張としてのカタカナ表現のいずれも大田洋子の「復興とは別のもの」観、四國五郎の、「核を廃絶し、この地球上で平和に生きて」いくための「世界共通語」観と照らし合わせたとき、大きな齟齬はない。ここで注目すべきは、①や③がなぜカタカナで書かれたのかということである。前述したように、①、③では別の街ができあがる前の段階、原爆が落ちて以前とは全く違う光景になった街を「ヒロシマ」とカタカナで表現しているが、「八月六日」では「涯しない瓦礫と燃えさしの堆積であった広島」、「炎の季節」では「すり鉢の底に／つぶれた広島から」と、似たような文脈で漢字表現が用いられている場合もある。こうした表現の分散については、望月悠馬の指摘する、峠の「へ平等に使用しよう」という創意」が、『原爆詩集』全体に登場する合計数のみならず、ひとつの詩の中でも働いていた可能性を考えることが

できる。③「たしかに／三尺ばかり／高くなったヒロシマ」、そして「すり鉢の底に／つぶれた広島」は、共に復興前の街であり、どちらも「炎の季節」にみられる表現である。ここで「炎の季節」に登場する三表現とその変遷をまとめる。

- ・つぶれた広島から (ヒロシマ→ひろしま→広島)
- ・予定されたヒロシマの (ヒロシマ)
- ・ひろしまは／もう見えない (ヒロシマ→ひろしま)
- ・高くなったヒロシマ (ヒロシマ)
- ・ヒロシマ族の／網膜から (ヒロシマ→ひろしま→広島→ひろしま→ヒロシマ)

初期段階では「ヒロシマ」が五回であったが、「ひろしま」が三回、「ヒロシマ」が二回登場する段階を経て、最終的に「ヒロシマ」が三回、「ひろしま」が一回、「広島」が一回と三種類全ての表現が生まれる過程が見える。「ヒロシマ族の／網膜から」については最終的にカタカナ表記に戻っているものの、「ヒロシマ」の五分の三を「ひろしま」に変え、そのうち三分の二を「広島」に、そしてその半分を再び「ひろしま」に戻す作業過程には、詩の文脈に合う適切な表現を探す意識に加え、三表現の回数をできるだけ平等に使用しようとした痕跡がある。続いて『原爆詩集』出現順にこれまでの三表現を並べてみる。

広島、ひろしま、ひろしま、ヒロシマ、ひろしま、広島、ヒロシマ、ひろしま、ヒロシマ、ヒロシマ、ひろしま、広島、広島、ひろ

しま、ひろしま、ヒロシマ、ひろしま、ひろしま、広島、ヒロシマ、ヒロシマ、広島、ひろしま、ひろしま、ひろしま、ひろしま、ヒロシマ、ヒロシマ、ヒロシマ、ひろしま、広島、広島、広島、広島、広島

※詩題は、広島（八月六日）、ひろしま（炎）、ひろしま（盲目）、ヒロシマ（仮繻帯所）、ひろしま（とじとった母さん）、広島、ヒロシマ、ひろしま、ヒロシマ、ヒロシマ（炎の季節）、ひろしま（ちいさい子）、広島、広島、ひろしま、ひろしま（墓標）、ヒロシマ、ひろしま（影）、ひろしま（朝）、広島、ヒロシマ、ヒロシマ、広島（一九五〇年の八月六日）、ひろしま、ひろしま、ひろしま、ひろしま（夜）、ヒロシマ、ヒロシマ、ヒロシマ（景観）、ひろしま（呼びかけ）、広島、広島、広島、広島、広島、広島（その日はいつか）。

自筆稿本では「友」、「河のある風景」、「巷にて」、「その日はいつか」「希い」の五つを除く詩が『原爆詩集』完成形と同じ並びで書かれている。そして、「その日はいつか」以外の四つの詩には「広島」「ひろしま」「ヒロシマ」いずれの表記もないことから、最後の「その日はいつか」に登場する六つの「広島」を除いた状態の『原爆詩集』における三表現の登場順番については、自筆稿本での修正時に峠が目指していた状態と同じであると言えるだろう。

それを踏まえて見ていくと、四つ目までに三表現が登場し、その後も積極的に三種類の表記をばらけさせようとしていた意図がみえる。『原爆詩集』内の詩は、それぞれ『反戦詩歌集』、『アカハタ』

『われらの詩』の複数号に別々に発表されていることから、修正前の表記は詩を単体で眺めた際の表現と思われ、そして自筆稿本ではそれらの詩を峠の思う順番に並べたあとで修正されていることを考えると、修正過程、修正後の表記は詩を跨いだ全体を俯瞰しての表現であると言える。すると、①や③がなぜカタカナで書かれているのか、というより、むしろ似たような文脈で用いられている「八月六日」や「炎の季節」の「広島」側が、なぜ詩群を俯瞰で見たときにカタカナから漢字に直されているのかを考えるのが妥当であろう。「八月六日」、「炎の季節」がカタカナ表記から変更されなかった場合、漢字表記が登場するのは前から数えて十二個目の「墓標」にみられる「広島」である。しかしこの二つを漢字に変えることで、十二個目までの表記は「広島」が二つ、「ひろしま」が五つ、「ヒロシマ」が四つとなる。また、カタカナ表現を漢字に変え、再びカタカナに戻した前から十個目の「炎の季節」の「ヒロシマ族」表記の変遷は、漢字にしている時点では「広島」が三つ、「ヒロシマ」が三つとなり、更に均一に表現がばらける。このことから、「炎の季節」の漢字表現においては、第三節一段落目で考察した理由に加えて、望月の指摘する登場回数合計からみた表記の平等論の他に登場順における平等も意識し、全体のバランスを見て何度も表記を変更していた可能性も十分に考えられるだろう。そして、「八月六日」、「炎の季節」の「広島」は、全体の三表記の登場バランスを考え、外来語である、新たに生まれた違う街である、戦争反対の意思を内包している、などのカタカナから変えうることできかない明確な理由を除いたカタカナ表現のうちいくつかを選び、漢字に変えたと考えるのが妥当であろう。そのとき、全てを漢字に変え

ると出順の均一さが再び崩れるため、選ばれなかったのが①や③であり、選ばれたのが「炎の季節」や「八月六日」ではないだろうか。

終章 『原爆詩集』と「文学的眞実」

松岡直美は大田洋子の『屍の街』における事実と虚構について考える際、この小説が「客観的眞実」と「文学的眞実」に分けられるとしている。

しかし、「人間の眼と作家の眼とふたつの眼」で広島の惨状を見た大田は、客観的眞実のみでは「罹災者の心理への理解は淡白なものに思え」、事実を書きとめたのと同じ熱意をもって作家でなければ書けない眞実を抽出する。(中略)

このような人間心理の分析および歴史の考察すなわち客観的眞実による眞実 (factual truth) に対する文学的眞実 (literary truth) の抽出は作家の言葉による事実の語り直しによって可能となる。³⁰

こうした「文学的眞実」が担う側面として、松岡直美は「原爆が物理的破壊にとどまらず人間精神も侵すことを示」すこと、そして、「終戦になってから原爆病で死ぬことの口惜しさと不条理」から生まれた「原爆投下への責任追求」³¹であると述べている。このような「人間の眼」で書かれた部分と「作家の眼」で書かれた部分を峠の『原爆詩集』においても考えるとき、それは壺井繁治の指摘

する「原爆投下の惨害の細部にわたる描写と、それをたんなる叙述や描写におわらせぬ『歌と調べ』との結合の形式」³²であり、あるいは堀本嘉子の「原爆投下という事実を伝えることのみ縛られず、同時代の問題を告発していく」³³姿勢ということになるのだろう。第二章では「広島」、「ひろしま」、「ヒロシマ」それぞれ三つの表現とその変遷について考察してきたが、全体を俯瞰したときに、カタカナから漢字へと具体化と、カタカナからひらがなへと抽象化が同時に起きているのが印象深かった。ここでの具体化とは、漢字化による「客観的事実」への接近であり、また抽象化とは原爆地をカタカナにすることで含まれていた固有の意味の喪失である。カタカナ表記を減らす、ということの意味については、言葉の持つ本来の意味を失った抽象的な表現からの脱却による詩的表現力の向上であると考察してきた。では、こうした変遷は『原爆詩集』における事実と虚構について考える際、どのようにあてはめることができるだろうか。

前場理恵子によると、「ヒロシマ」という呼び方が広まった経緯について「日本国外からの要因である可能性」があり、「広島や長崎で起こった出来事を英語ではHiroshima/Nagasaki、あるいはHiroshimaと表し、それを外国人の著者ハーシーが原稿のタイトルに用いたことによって日本でカタカナ表記されている」³⁴という。「ヒロシマ」の起源が外来語であるというこの仮説に基づいて考えると、世界に向けて平和を発信する際に、原爆文学というジャンルの作品が世界共通語として英語である「ヒロシマ」を多用することは合理的である。するとやはり、峠がカタカナを漢字、ひらがなへと変えていく過程には、共通語ではなく、自らの言葉で原爆を語る

うとする葛藤があったと思えてならない。実際に、『原爆詩集』のあとがきの一部を見ると、

私はこの稿をまとめてみながら、この事に対する詩をつくる者としての六年間の怠慢と、この詩集があまりにも貧しく、この出来事の実感を伝えこの事実の実態をすべての人の胸に打ちひろげて歴史の進展における各個人の、民族の、祖国の、人類の、過去から未来への単なる記憶でない意味と重量をもたせることに役立つべくあまりに力よわいことを恥じた。

と、「出来事」ではなく「出来事の実感」、そして「記憶」ではなく「単なる記憶でない意味と重量」を求めて苦しんでいたことがわかる。それに対して『原爆詩集』完成時点で峠の出した答えが、画的であった「ヒロシマ」という世界共通語であるカタカナの表現を「広島」、「ひろしま」と多様化してゆくことによる「文学的眞実」の抽出なのである。「ちいさい子」、「としとつた母さん」で登場する「ひろしま」は、原爆による惨害な状況である土地の客観的描写ではなく、慣れ親しんだ個人の記憶を内包した言葉であったり、現実を直視することが困難になった人間の脳内に広がる風景の呼称であった。こうしたひらがなの「ひろしま」が担う原爆による人間の精神的变化の表象は、峠が「作家の眼」をもって原爆被害を語り直すことによって表現することができる部分であろう。峠は「景観」で描かれる「ロンドンの中に燃えさかるヒロシマ」や「炎の季節」で描かれる「予定されたヒロシマ」のように、「人間の眼」による「客観的眞実」からは逸脱した想像上のロンドンでの光景や、原爆

が落ちる前、アメリカが空から見た光景をカタカナによって描写し、「その日はいつか」では原爆が落ちる前の不安に満ちた街を漢字で描写した。「一九五〇年の八月六日」では「今日を迎えた広島／街の真中」という漢字を用いた客観的描写によって、「集り」が禁止され「警官に占領されたヒロシマ」という、原爆そのものではなく、原爆によって生み出された社会構造の変化や被差別意識をカタカナによる「ヒロシマ」で描写する意味を生んだ。同時に峠は、「としとつた母さん」、「ちいさい子」、「墓標」などで、「作家の眼」を用いて原爆の被害に遭った市民個人の精神世界の「ひろしま」に入りこむことで、文学的であり、同時に具体的な描写を可能にした。それらは全て、峠が推敲を重ねていく過程で自身の生活感から選択される言葉に向き合った結果生まれた分岐であり、同時に漢字、ひらがな、カタカナの数が均等にばらけていることは『原爆詩集』が様々な「文学的眞実」を内包し、峠が推敲過程でそれを作家として自身の言葉で語り直そうと試みた詩集であることを示す。こうしたことを踏まえると、この詩集における評価として、残酷な客観的事実を伝えるにとどまらず、文学的な面も垣間見えるといった方向ではなく、むしろ客観的な事実も含め、峠が原爆という事象から発生した変化を、自身の生活から生まれる個人的な感覚によって言葉を選び取り、文学として丁寧語り直していったものであるという評価ができる。

また、今回こうした同一の音を持つ地名表記の差異への着目を発端とした『原爆詩集』の表現分析を行うにあたって、それが他言語への翻訳によって非常に困難なることを追記しておきたい。大原三八雄による『英訳原爆詩集』 The song of Hiroshima-日英対

照』³⁵に掲載されている『原爆詩集』内の詩をみると、「仮縋帯所にて」の「焼け爛れたヒロシマの」は「Inflamed Hiroshima」、「ちいさい子」の「ひろしまの街を焼き」は「Burn the city oh Hiroshima」、「墓標」の「広島平和都市建設株式会社」は「The Hiroshima Peace City Construction Firm」と、漢字、ひらがな、カタカナのいずれも「Hiroshima」という同一表記に収束している。漢字、カタカナ、ひらがな、そして時にはローマ字の四種類を用いる日本語の文学作品を単一のローマ字で翻訳する行為の限界について、そしてそれにより失われる『原爆詩集』の文学的価値については、別途考察の余地があるだろう。大原三八雄による英訳に限定した議論をするのであれば、こうした繊細に三表現が使い分けられている詩集の全てを単一の表記で統一することは、過度な単純化であるように思える。例えば同詩集の「眼」では「眼、め、メ」という表現が出てくるが、大原は「EYES, Eyes, eyes!」と三表現それぞれを別の言葉として認識し、実際に訳し分けている。その他、「死」の最終連においても、次のように訳している。³⁶

し、死な To Die?
ねば Have
な I
らぬ To
か Die

このように表記の差異や配置の不規則さが生み出す視覚的要素を翻訳に取り入れていることを考えると、「広島」、「ひろしま」、「ヒ

ロシマ」の表記の差異に対しては十分な関心を抱いていなかったと言える。合わせて追記したいのは、三表記の細かい差異において重要な要素であった外部からの視点と内部からの視点による、翻訳によって海外で読まれる際、外部からの視点に統一される点である。これは日本における海外文学もまた同様であるが、こと個人的な記憶を内包する言葉と外国語由来の言葉がひとつの単語に統合された英訳『原爆詩集』では、それが顕著になると言っていいたいだろう。こうした翻訳に関する問題は、日本語から日本語への翻訳にも存在する。大木正夫が作曲した「人間をかえせ…カンタータ」³⁷では東京交響楽団による演奏に乗せて峠の詩が朗読・歌唱されるが、こうした発声においても曲中の「ひろしま」、「ヒロシマ」の区別はない（第二章「仮縋帯所にて」、第四章「ちいさい子」の音声を比較）。こうした他メディアへの翻訳や他言語への翻訳は、核を廃絶し平和を目指すという反戦のメッセージをより強く増幅させ、幅広い人間へと拡散する力があり、その面では大いに意義のある活動である。しかしそれは、これまでに考察してきた漢字、ひらがな、カタカナの三種類の表現のうち、カタカナの、更にその一部に内包されている要素を抽出、拡大したものであり、同時に峠が自らの言葉で語り直してきた文学的試行錯誤の喪失であるように思えてならない。

注

- 1 大田洋子『屍の街』中央公論社 一九四八年十一月
- 2 松岡直美『原爆文学における事実と虚構の相克』日本比較文学会一九八七年
- 3 川口隆行『原爆文学という問題領域』創元社 二〇〇八年四月 一六頁
- 4 峠一夫・増岡敏和編集『峠三吉作品集 上』青木書店 一九七五年一六〇頁
- 5 峠三吉・原爆の詩編纂委員会編『原子雲の下より』青木書店一九五二年
- 6 峠一夫・増岡敏和編集『峠三吉作品集 上』青木書店 一九七五年 詩論「子供の詩は教える——原爆の詩を選考して——」九七頁
- 7 前同
- 8 堀本嘉子『出来事と詩の言葉——峠三吉「原爆詩集」と「われらの詩」同人の活動から——』日本大学大学院国文学専攻論集 二〇一五年十月三十日
- 9 壺井繁治『詩と政治の対話』新興書房 一九六七年七月
- 10 野坂昭雄『峠三吉の詩——目取真俊「水滴」と戦争詩を補助線として』花書院 原爆文学研究 二〇〇五年八月
- 11 ダックワースネイサン『峠三吉「原爆詩集」論 原子爆弾と広島表現』日本文化研究プログラム研修レポート集 広島大学学術情報リポジトリ 一九九八年
- 12 望月悠馬『原爆詩における「表記」の問題 峠三吉を中心に』現代詩手帖八月号〈戦後〉八〇年への問い 思潮社 二〇二五年八月 九二頁
- 13 吉田欣一編『日本現代詩文庫17 栗原貞子詩集』土曜美術社 一九八四年七月 四一頁
- 14 大田洋子『夕風の街と人』一九五三年の実態』ミリオンブックス
- 15 大日本雄弁会講談社 一九五五年 一三六頁一六行
- 16 栗原貞子『私は広島を証言する』詩集刊行の会 一九六七年
- 17 前同「同じ空の下で」
- 18 前同「犯された街」
- 19 Urszula STYCZEK『日記文学としての原爆文学の考察——原民喜の場合——』国文学研究資料館 二〇一六年十一月
- 20 藤島宇内編『日本現代文庫100 原民喜詩集』土曜美術社 一九九四年十二月 小海永二による解説「幻視者原民喜」一四五頁
- 21 四國五郎著・四國光編『戦争詩』藤原書店 二〇二四年七月
- 22 前同 三〇頁
- 23 井上ひさし「少年口伝隊一九四五年」『戦争×文学19 ヒロシマ・ナガサキ』集英社 二〇一一年六月 三八九頁
- 24 詩「ひろしまの子」原水爆禁止世界大会にて一九八〇年に発表。四國光『反戦平和の詩画人 四國五郎』藤原書店 二〇二三年五月の年表を参考
- 25 四國五郎『ひろしまのスケッチ ひろしま文庫』広学図書 一九八五年五月
- 26 12に同じ 九一頁の表一を参考
- 27 峠三吉著・池田正彦、三人社編集部編『原爆詩集 自筆稿本』三人社 二〇一三年六月（同出版社より『復刻版 われらの詩』の付録として刊行）
- 28 4に同じ 以降も『原爆詩集』内の詩は全て『峠三吉作品集 上』を参考
- 29 峠一夫・増岡敏和編集『峠三吉作品集 下』青木書店 一九七五年「象徴的手法について」八七頁
- 30 10に同じ
- 31 2に同じ

31 前同

32 壺井繁治「峠三吉の業績について」『われらの詩【復刻版】別巻 風のように炎のように 峠三吉追悼集』より 三人社 われらの詩の会刊（一九四九年～一九五三年）二〇一三年六月

33 8に同じ

34 前場理恵子『ヒロシマ・フクシマはどのように表象されたか』新聞におけるカタカナ表記を中心に『早稲田大学政治経済学部政治学科二〇一五年度卒業論文』

35 大原三八雄編『英訳原爆詩集1 The song of Hiroshima-日英対照』太平出版社 一九七一年六月（該当箇所は、『第三部 峠三吉作品集』一七九頁から二四五頁の「序」「八月六日」「死」「炎」「盲目」「仮纏帯所にて」「眼」「倉庫の記録」「ちいさい子」「墓標」「朝」「呼びかけ」の十二編）

36 前同一九〇～一九一頁

37 詩・峠三吉 作曲：大木正夫『Take back the human 1 : based on Sankichi Toge's poem The A-bomb verses 人間をかえせⅡ：グラント・カンタータ Take back the human 2 : cantata』Toshiba RECORDS 一九六一年

その他の参考文献

・後山剛毅『原民喜の「小説」論——「新しい人間」が生み出す「言葉」をめぐって——』Core Ethics Vol.19 二〇一三年三月

・石原吉郎「詩の定義」『石原吉郎詩文集』より 講談社文芸文庫 二〇〇五年六月

・荻野文隆『ヒロシマ・ナガサキの歴史性：戦後日本の民主主義を問う』「環」一号 藤原書店 二〇〇〇年四月

・川口隆行『われらの詩』と朝鮮戦争』大阪大学日本学報 二〇一四年

・佐々木健郎「抒情の改革」『われらの詩 別巻 風のように炎のように 峠三吉追悼集』より 三人社 われらの詩会刊（一九四九年～一九五三年）二〇一三年六月

・重松清他共著『メッセージ&フォトブック No Nukes ヒロシマ ナガサキ フクシマ』講談社 二〇一五年四月

・嶋岡晨・大野順一・小川和佑編『戦後詩大系』三一書房 一九七〇年

・菅谷規矩雄『詩的リズム——音数律に関するノート』大和書房 一九七八年三月

・寺山洋一『雲雀と少年 峠三吉論』文芸社 二〇〇一年六月

・中山麻伊香『「反核」と「平和」と原爆被害をめぐる言説』『平和研究』第五七号 二〇二二年一月

・増岡敏和『八月の詩人 原爆詩人・峠三吉の詩と生涯』東邦出版社 一九七〇年八月

・村田正夫『村田正夫詩論集 詩の社会性』現代書館 一九七七年八月

・本島等『広島よ、おごるなかれ——原爆ドームの世界遺産化に思う』平和教育研究年報一九九六年度 Vol.24 一九九七年